

でやつてこの現況である。私は共漁の実情と洞察されて、お力になつて戴きたことをお願いする次第である。

## 二. 資源計算室 PODAC について

# 連絡二ノ一人

日本海区水産試験研究

第54号

新潟市万代島  
日本海区水産研究所

印刷  
丸久洋紙店印刷部  
昭和30年7月1日発行

## 日本海 秋田沖の「さんま」を 追つて 水野金市

(53)

「さんま」と云えば秋刀魚と書くほどで、秋をシエンとするものと決つてゐるが、初夏の頃日本海を北上するさんまを從東北県の一都で捕り漁法でとつてゐる處もあつたが、流網か棒受網で獲れないものだろうかとの考から、秋田の沖合を主に昭和二十七年から集魚灯で集めてみたが、稚魚はよくつくが、成魚は稀にしか集まらない。二十八年もやつてみたが駄目だった。

またまた同年六月上旬にいわし流網漁船がいわし漁場でさんまの大群を発見し何とか獲る方法はないかと、地元の漁協から相談を受けた。試験船が上岸中で出漁出来ないので、以前太平洋岸で採集した流網を貸してやつた。ところが網数が少いのに倍受申込船が多數なので、止むなく漁協では一船に網二反反対貸付けた。漁獲の最高は一夜で四百貫、最低で十五貫といふ結果となつた。その時は勿論魚の「ワキ」を見て放網したのだが、翌晩にはもう魚の姿が見えないのに、とにかく日本海のさんまは足の非常に速いものだと結論された。

「さんま」と云えば秋刀魚と書くほどで、秋をシエンとするものと決つてゐるが、初夏の頃日本海を北上するさんまを從東北県の一都で捕り漁法でとつてゐる處もあつたが、流網か棒受網で獲れないものだろうかとの考から、秋田の沖合を主に昭和二十七年から集魚灯で集めてみたが、稚魚はよくつくが、成魚は稀にしか集まらない。二十八年もやつてみたが駄目だった。

またまた同年六月上旬にいわし流網漁船がいわし漁場でさんまの大群を発見し何とか獲る方法はないかと、地元の漁協から相談を受けた。試験船が上岸中で出漁出来ないので、以前太平洋岸で採集した流網を貸してやつた。ところが網数が少いのに倍受申込船が多數なので、止むなく漁協では一船に網二反反対貸付けた。漁獲の最高は一夜で四百貫、最低で十五貫といふ結果となつた。その時は勿論魚の「ワキ」を見て放網したのだが、翌晩にはもう魚の姿が見えないのに、とにかく日本海のさんまは足の非常に速いものだと結論された。

「さんま」と云えば秋刀魚と書くほどで、秋をシエンとするものと決つてゐるが、初夏の頃日本海を北上するさんまを從東北県の一都で捕り漁法でとつてゐる處もあつたが、流網か棒受網で獲れないものだろうかとの考から、秋田の沖合を主に昭和二十七年から集魚灯で集めてみたが、稚魚はよくつくが、成魚は稀にしか集まらない。二十八年もやつてみたが駄目だった。

鶴島から佐渡方面を探索してみようといふ

話題

十六度乃至十八度の潮目をねらうことにして

出しだが、魚群が発見出来ず、網を入れずじ

まで帰来つて来た。

日水研の下村部長の説明を頼りに

第一回の出漁をしたのだが、当時すでに北海

道方面では相当の漁があるとの情報を得てい

たが、秋田沖のさんまの魚道とか漁場といつ

たものは何処にあるか、全く五里霧中の状態

であった。

鶴島から佐渡方面を探索してみようといふ

話題

## 日本海 水試 利用担当者会議

日水研主催の第三回日本海水試利用担当者会議は鳥取県及び青森県の御岳話で南部地区は鳥取県境港、境島等学技で六月四~五の両日、北部地区は青森市八甲荘で六月十三

待し得る自信が出来た。

其後も引続いて七月上旬迄試験を実施する予定であり、いざ後日詳細発表するが、とりあえず秋田沖のさんまを追いかけている現

況を報告する。  
(秋田県水試場長)

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 水産研究会長会議  
○ 香住支所研究談話会  
○ 人事異動  
○ 内務省  
○ 魚探

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 日本海水試利用担当者会議  
○ 佐渡先端漁場の漁獲価値と漁獲位置についての予報

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 水産研究会長会議  
○ 香住支所研究談話会  
○ 人事異動  
○ 内務省  
○ 魚探

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 日本海水試利用担当者会議  
○ 佐渡先端漁場の漁獲価値と漁獲位置についての予報

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 水産研究会長会議  
○ 香住支所研究談話会  
○ 人事異動  
○ 内務省  
○ 魚探

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 日本海水試利用担当者会議  
○ 佐渡先端漁場の漁獲価値と漁獲位置についての予報

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 水産研究会長会議  
○ 香住支所研究談話会  
○ 人事異動  
○ 内務省  
○ 魚探

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 日本海水試利用担当者会議  
○ 佐渡先端漁場の漁獲価値と漁獲位置についての予報

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 水産研究会長会議  
○ 香住支所研究談話会  
○ 人事異動  
○ 内務省  
○ 魚探

○ 第十回日本海海洋調査技術運営会  
○ 水産研究会長会議  
○ 香住支所研究談話会  
○ 人事異動  
○ 内務省  
○ 魚探

1955. VII

十四の両日に開催された。会議には青森から山口に到る関係府県の場長、及び利用担当官、水産庁からは第一田辺技官、日水研からは野口利用部長等が出席し、提出議案の審議、研究発表、業者に対する講演会及び懇談会、工場等の見学を行つた。主なる協議決定事項研究発表、見学等は次のようであつた。

(一) 協議決定事項  
 資源化学研究費に關する件、資源化学研究等に対する基礎研究に関し、国庫助成の増額、拡充を全国場長会議に提案し、全国場長会より関係方面に陳情する。

(二) 利用研究の連絡調整  
 (イ) 水産庁主催の利用研究班会議へ水研利用担当者会議(に)各府県水試担当者も参列出来るよう考慮されたい。

(ロ) 鮮度保持実態調査を本年度の各水試共通研究テーマとし、次回の利用担当者会議には鮮度保持の実態に関するシンポジウムを開催する。

い) 資源化学研究にはイワシを追加する。  
 (四) 第54号

計画(三) 従来の単なる製造加工試験から脱却して、生物学的研究を行い、その成果を業界に指導する。  
 (四) PHメーター、等を目標とする。

その他 各水試から二十九年度の研究経過の概要

水産廃棄物の利用状況、乾燥と油焼け防止の実状等の報告が行われた。

研究発表  
 (一) 工場废水並に湖水分析に於ける一知見  
 (二) 時期的魚型に依るサバの成分変化  
 (三) アナゴ肝臓中のビタミンAについて  
 (四) 暖冬期の寒天の変化防止に関する研究(第一報)  
 (五) 天日乾燥中の魚肉温度の変化  
 (六) 乾燥位置の高さとハイの附着数との関係  
 (七) サバの原科学的研究(第1回)  
 (八) 大羽イワシの原科学的研究  
 (九) 汎網漁獲物の鮮度保持の調査  
 (十) サバの原科学的研究  
 (十一) 魚油の酸化防止について  
 (十二) 石川県に於ける鮮度保持の実態  
 (十三) サバの資源化学的研究  
 (十四) スケソウの鮮度保持実態調査  
 (十五) 雄物川、米代川の水質汚濁予測調査  
 (十六) 青森県の水産製造の概況  
 (十七) アグラツノザメの肝油、VA濃度に關係ある二~三の型質について  
 (十八) 鮮度保持研究の経過報告  
 (十九) 資源化学調査の経過報告  
 (二十) 業者に対する講演会

見学  
 青森市 釜詰工場 竹輪工場 肝油工場  
 境港 釜詰工船 川土丸(六〇〇屯)  
 佐渡北方漁礁の漁場的価値と  
 飄羣瀬の位置についての予報

(一) 日本海には日本列島に並行して島、堆砂三十有余ものぼつて存在し、これらはそれをより考慮されたい。

(二) 天日乾燥中の魚肉温度の変化  
 (三) 乾燥位置の高さとハイの附着数との関係  
 (四) 暖冬期の寒天の変化防止に関する研究(第一報)  
 (五) 天日乾燥中の魚肉温度の変化  
 (六) 乾燥位置の高さとハイの附着数との関係  
 (七) サバの原科学的研究(第1回)  
 (八) 大羽イワシの原科学的研究  
 (九) 汎網漁獲物の鮮度保持の調査  
 (十) サバの原科学的研究  
 (十一) 魚油の酸化防止について  
 (十二) 石川県に於ける鮮度保持の実態  
 (十三) サバの資源化学的研究  
 (十四) スケソウの鮮度保持実態調査  
 (十五) 雄物川、米代川の水質汚濁予測調査  
 (十六) 青森県の水産製造の概況  
 (十七) アグラツノザメの肝油、VA濃度に關係ある二~三の型質について  
 (十八) 鮮度保持研究の経過報告  
 (十九) 資源化学調査の経過報告  
 (二十) 業者に対する講演会

(一) 漁獲物の鮮度保持と練製品の将来  
 (二) 水産物の乾燥について  
 (三) 漁獲物の鮮度保持について

日水研 鷲口技官  
 岛根水試 丸一技師

境港  
 青森市

(一) 漁獲物の鮮度保持と練製品の将来  
 (二) 水産物の乾燥について  
 (三) 漁獲物の鮮度保持について

日水研 鷲口技官

佐渡北方の漁礁群の一帯に於いて調査を進めた昭和二十九年並に三十年度に亘り、二十数点の測量線によつて漁礁群北方に水深三一〇メートルの新海岸一個を発見(三八一四三・五分)、一三八一七分)、漁礁群附近に位置する水深、底質、形状、斜面の勾配等について調査し、これによつて海図を作製するところに、この海図にもとづいて海図を作製する月現在迄二カ月

同じように、食乏だと自稱していくても  
新型カメラや電気洗濯機を持つてゐる者  
があるかと思うと、所謂赤食洗うが如し  
と云うのもあるから、どの程度を食足とする  
のか、そのけじめは定かでない。  
しかし、一概常民の間では、あれは食足で  
あるかないかの規準は、ちやんと伝承的にも  
持つていて、この規準からみると、米作りの  
村よりも海ぞいの村で、魚介を漁ることを生  
業としている集落では、文句なしに多くの者が  
食足している。それが、愚情や不健康やろ

食乏するといふことは、手邊つて、うまく行かない。その上、馬鹿看扱いされるのは、東西古今の常である。食すりや鉛する。椎打ちや脛うつ、米かみや舌かむと庶民は、いみじくも表現してゐる位だから、貪乏の好きな者はおそらくあるまい。それにもかかわらず、何時の時代にも貪乏が絶えないのは、一體どうしたことであろうかなどと問題を起してくると、なかなか面白い話となることは、誰しも承知していることである。

(二) これら主として行つた瓢箪瀬及び附近一  
浬の新漁場を開拓することが出来た。  
（三）これより十八回の地ならし、一四二回にわ  
たる曳網調査を行い海面々積大約一二〇平方  
メートルの新漁場を開拓することが出来た。

臭探  
内橋漂

近藤康男博士の昭和二十八年以降の近著である「貧しさからの解放」、「統食しさからの解放」、「第三貧しさからの解放」には、農村の貧しさのよつて来たる處が、社会経済的な観点から、又は時には歴史的な視野から論述されてゐる。農村の貧乏ぶりとも比較出来ると思ふに最近の好書であろう。

どうしたら、こうした貧乏を追拂うことが出来るかと云う対策の前に、この貧乏の原因をつきとめる事が必要であろう。かつてのこうした聚落の窮乏の大きな原因は、歴史的に見て、割合わかつてゐる。しかし現在では社会は復雜で、把みにくい点が多いのも一つの原

(三) 斜面で底曳漁場として好適であること  
二〇〇メートル以浅は平頂であること  
採取された底質は二十余点で主として火成岩質の岩塊及黒砂を得て居り岩塊の大なるものは五十余貫、揚網に困難した程で瓢箪磯上から採取された。  
板状のものは瓢箪瀬の構成岩質を物語るものではないかと思考される。そしてこれら露出された岩肌には「ももいろさんご」「白さんご」など簇生がみられる。又向瀬北西端附

近からず大西洋の珪藻土を深く含んでおり、以上概要であるが、二〇〇米以浅部は岩肌が露出が多く、三〇〇米以深は砂泥に覆れている。

四、帆築灘南側は漁場として條件がよいため十数本の測量線と百数十回の探査を行なったところ、二〇〇米等深線が海図の位置より一浬一二五浬程度本州寄りに存在することが明らかとなり、これに付れてこの海域の水深は稍大きな差異のあることがわかつた。又向瀬の北西端の水深二〇〇米以淺部が現在の海図位置より稍西方にのびていることもわかり向瀬、帆築灘間の水深はまた稍測を要するものがある。

五、生物相は秋季は「やきぎのまい」を中心とする「すわい」、「すけそう」、「はたはた」など豊富にみられ、春季には「かれい」、「類」を主に、「すわい」、「たら」、「すけそう」等が漁獲され、沿岸漁場の一網当たり一七貫一二四貫に対して本漁場では三貫一三三貫と優位を占めている。

六、佐渡北方漁礁帶中帆築灘のみをとりあげてもその位置、形状、底質、水深等に相当の調査を要することがわたり、そして稍難に過ぎない我々の測量に依つても尚一二〇平方浬海面の新漁場を追加し得たわけである。これを向瀬、鳥海礁等を含む、わゆる佐渡北方全域に推しひろめると、き尚相當の漁場面積の拡大を含めた漁業上の要素の発見をみると、これは確実であると信する次第である。(石川県水試)

格会が第九管区海上保安庁会議室で開かれた。出席者は約五十名で次の如き該事が進められた。

感会裡に終了した。

記

- (1) 挨拶 莫九管区海上保安本部長 井本敏雄  
 (2) 議題へ議長第二管区海上保安本部水路部長  
 (3) 山夏季観測について、日本海区水産研究所  
 (4) 次回の会期及び当番扶助肉

- (1) 前回以後の各扶助の事業及び今後の計画

各扶助

三、研究発表（座長舞鶴海洋気象台長）

川崎英男

- (1) 佐渡北方漁場の位置並に漁場的価値について

田畠嘉六（石川水試）

- (2) 水温積算平均値から海水を求める一例について

下村敏正（日水研）

- (3) 日本海の沿岸水温の年変化

向井茂（日水研）

- (4) 海流瓶による海流調査

田宮美殊（第九管区）

- (5) 能登における夏、秋の漁況と海況、低気圧との関係

永田俊一（日水研）

- (6) 季候期の長期予報 星野常雄（新地気）

四、特別講演「協同観測と深海探査」

須田院次

- (5) シンボジウム（日本海の冷水塊について）  
 (6) 冷水塊の消長と対馬暖流

田宮美殊（第九管区）

- (7) 日本海の断面における冷水塊の移動について

この日は各水研所長より二十九年度における事業報告を以て終止した。

第三回（六月八日）農林省会議室及び東海区水研会議室において左記のとおり開催された。

出席者は水産庁調査研究部長、研究一課長（五十嵐三雄（第九管区））とおり開催された。

本誌第五十三号で予告した水産研究所長会議は、予定どおり六月七日～十日の四日間農林省会議室及び東海区水研会議室において左記のとおり開催された。

出席者は水産庁調査研究部長、研究一課長（五十嵐三雄（第九管区））とおり開催された。

（3） 入道崎北西方の冷水塊について 谷内克己（舞鶴海洋気象台長）  
 下村敏正（日水研） 山下行成（第二管区）  
 （4） 佐渡沖冷水域と大羽イワシ漁況について 下村敏正（日水研）  
 ディッシュは、終始非常に活潑な討論が行なはれたが、更に次期連絡会においても引き続き検討されることになった。

また、次期当番扶助は舞鶴海洋気象台が当り、次回開催は今秋行なはれる予定である。

## 水産研究所長会議

## 香住支所研究談話会

日水研香住支所においては、六月二十日、

地元関係者多數出席のもとに第三十七回研究

談話会が開催された。

尚演題及び発表者の通り

一、但馬沖ズワイガニの生態について

日藤勝千代（資源科）

二、日本海産ニギスの産卵について 渡辺

小川良徳（資源科）

三、ハタハタの側線器について

日藤勝千代（資源科）

四、片眼のソウハチについて 小川良徳（資源科）

五、底魚の成分の含有量について 平井正夫（利用科）

六、エゾボラモドキ（赤ベイ）の毒性について 平井正夫（利用科）

兵庫県水産試験場長加藤利夫氏は去る四月

末日付にて退職され、代つて同場技師井上虎平氏が場長に就任された。

## 人事異動

入事異動

官の挨拶があり、統いて各水研所長より長官に對し、各種事項の要望があつた。

第四回（六月十日）

前日に引き続き、水研の運営について討議された。

会議なかばに藤永部長よりロードマップ会議出席の報告講演が行われた。